

祖母 《そぼ》

楠山正雄

青空文庫

一 青めがね

一雄は小学校へ行くようになって、やっと一月立つか立たないうちに、ふと眼病をわずらって、学校を休まなければならなくなりました。

それから毎日、一雄はお医者さまからくれた青い眼がねをかけて、おばあさんと二人——まだ電車のない時分でしたから——合^あ乗^{いのり}の人力^{じんりき}で、眼科の病院へ通いました。

「食べものに気をつけて上げて下さい。この子の眼は大たい胃腸のわるいせいなのだから。」

お医者さまはこうおばあさんにいいました。

「白い身の魚ぐらいに、なるべくお粥かゆがよろしい。」

二三日はお粥もめずらしかつたし、おばあさんが三度々々小さな鍋なべで煮てくれる半はんぺんやお芋いもがどんなにおいしかったでしょう。青い眼がねをかけて食べると、何もかも青く青く見えました。

「青いな、青いな、何を食べても青いや。」

一雄はおもしろがつて、お膳ぜんの上を箸はしで突ツつきまわしていました。ちょうど梅雨つゆの時分で、お天気てんきのわるい日がよくつづきました。そのうち毎日雨ばかり降るようになりました。

一雄の気分がだんだん重苦しくなつて、眼の奥がしくしく痛む日がつづきました。青い眼がねで何かを見るのが、うっとうしく、

じれったくって、悲しくなるほど不愉快でした。

食物たべものに好きすききらいをいう、というよりは、あれもいや、これ

もいや、のべつに「いや、いや」とばかり、一雄はいいつつけていました。

「僕、何でも青くって食べても旨うまくないんだもの。」

「じゃあ御膳ごぜんの時だけ眼がねをお取り。」とおばあさんはいいました。

眼がねを取っても、しばらくはやはり何かが青く見えました。

やつと白い光に慣れると、こんどは眩まぶしくって、眼にしみるような劇はげしい痛みを感じました。

「やはり眼がねをかけなければだめなんだよ、おばあさん。」

あんまり一雄が何も食べないので、おばあさんは心配して、瀬戸物やから小さな瀬戸物の玉子焼鍋たまごやきなべを買って来ました。

このお鍋の形が大へん一雄を喜ばせました。

「これ何なんにするの、おばあさん。」

「玉子をやくのだよ。」

「こんなもので焼くの、おもしろいなあ。」

「これで玉子焼をこしらえてあげるが、食べるかい。」

「ああ。」

いつもになく一雄が食べたそうな様子をしているので、おばあさんはどんなに喜んだでしょう。

その日の夕方ゆうがた、一雄が茶の間の隅すみつこで、いつまでかかって

もほんとうに出来ない積木細工のお家を建てたり、こわしたりしている間に、おばあさんはせつせと玉子焼のしたくにかかっていた。
ました。

明りがついて、お膳が出ると新調の可愛らしい玉子焼のお鍋が、一雄の小さなお膳の上にのっていました。

「ほら、あけてごらん、それはおいしそうに出来たから。」

一雄が瀬戸物の蓋をあけると、ぷんとやわらかな少し焦げくさい、旨そうな匂いが立ちました。

「まだあついかしら。」

こういいながら、めずらしくにつこりして、一雄は玉子焼の中に箸を突ツ込みました。

おばあさんもにこにこしながら、

「ああ、ゆつくり、たんとおあがりよ。」といいました。

でも一口、玉子焼を口に頬ほばると、一雄は急にいやな顔を
して、すぐはき出してしまいました。

「ああ、臭い、僕いやだこれ、お酒くさいから。」

一雄は泣き出しそうな顔をしていました。

「お止し、お止し。厭いやなら上げないから。」

おばあさんはこういつて、いきなり玉子焼のお鍋をとり上げて、
中身をそっくりお庭に投げ棄すててしまいました。ちょうど通りか
かったポチが見つけてみんな食べてしまいました。

なぜおばあさんがこんなにおこったのか、一雄にはわかりませ

んでした。おばあさんもなぜそんなに腹が立つのか、自分でもわかりませんでした。

二人はお互いにかっかりして、気の毒になって、このおばあさんと、孫とは、別々の心持でしくしく泣き出しました。

二人の半日楽しみにして待^{まち}設^{もう}けた晩御飯はめちやめちやになりました。

おばあさんはお酒の好きな人でした。せっかく孫の口を甘く^{うま}しようと思つて入れた幾滴かのお酒が、まるつきり予期しない反対の結果を生んだのでした。それを知つて、一雄は余計悲しくなりました。

二 花ガルタ

一雄の家に奉公していた小僧で、器用に画をかく子がありました。

或日この子は大きな鳥の子の紙をどこからか買つて来て、綺麗にボール紙に貼りつけて、四十八に割った細い罫を縦横に引いて、その一つ一つの目に、十二カ月の花や木の細かい画を上手にかきはじめました。

一雄はどんなにそれが欲しかったでしょう。

「貞吉、貞吉、出来たらおくれ、ね。」

貞吉というのは、小僧の名でした。

「でもこれはまだほんとうに出来上^{できあが}っていないんですからね、すつかり出来あがったら上げましょう。」

「だっていつのことだか知れないじゃないか、いいからそれをおくれよ。」

「だめですよ、まだ彩色^{さいしき}もしてないし……」

「いいよ、彩色なんか僕自分でするから。」

「そんなわがままをおっしやってはいけません。あなたに彩色ができるものですか。」

「できらい、できらい。おくれってばよう。」

貞吉はそれでも手離そうとはしませんでした。書きのこした桜の花や、鳥の羽^はの手入れに夢中になっていました。一雄は、とて

もだめだと思つと、おどかしの積りでしくしく泣き出し^{なだ}ました。

そのうちほんとうに悲しくなつて、おいおい泣きながらお茶の間へ駈^かけ込んで行きました。

「どうしたの。」

おばあさんはもう目の色を変えていました。

「貞吉が、貞吉が……くれないんだ。」

貞吉は茶の間へ呼ばれて、さんざん叱^{しか}られて、理由^{わけ}はなしに、

丹精した花ガルタの画を、半できのまま取上げられてしまいました。美しく描^{えが}かれた梅や牡丹^{ぼたん}や菊や紅葉^{もみじ}の花ガルタは、その晩から一雄の六色^{いろど}の色鉛筆で惜しげもなく彩^{いろど}られてしまいました。

明くる日の朝、赤や青や黄に醜く塗りつぶされて見るかげもな

くなっている貞吉の花ガルタは、もう一度一雄の鋏はさみでめちやめちやに切りこまざかれて、縁側から庭に落ち散っていました。

「まあこんなに紙屑かみくずをお出しになって、坊ぼつちゃんはいけませんね。」

その昼すぎ、女中の清きよはぶつぶついいいながら、掃き出していました。たった一枚松まつに鶴つるの絵のカルタが、縁先の飛とび石いしの下に挿はさまったまま、その後のちしばらく、雨風にさらされていました。一雄はその日からもう花ガルタのことを思い出しませんでした。

十日ばかり後あとのことでした。一雄は縁先で遊んでいる内ふと見る気もなしに石の間に挿まって、皮が剥はげてボール紙ばかりになっ
っているカルタを一枚見つけました。急に花ガルタが惜しくなっ

て来ました。

貞吉はおこっているに違いない、貞吉に悪かった、一雄はそう
思って何だか悲しくなりました。

青空文庫情報

底本：「赤い鳥傑作集 坪田譲治編」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年6月25日発行

1974（昭和49）年9月10日29刷改版

1984（昭和59）年10月10日44刷

初出：「赤い鳥」大正10年3月号

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2001年3月28日公開

2001年4月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

祖母《そぼ》

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>